

## 2020 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	<b>Web 版看護学生用実習適応感尺度の開発</b>
キーワード	①Web 調査、②看護学臨地実習、③適応感

### 研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	コウ ケイホウ 龔 恵芳
配付時の所属先・職位等 (令和2年4月1日現在)	大手前大学 国際看護学部 助教
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	大手前大学 国際看護学部 助教
プロフィール	看護師として臨床で経験を積んだ。その間に臨床指導者として看護学生と関わる中で、臨地実習の途中でリタイヤする看護学生の多さに疑問を抱き、大学では心理学を、大学院博士前期課程では看護教育学を学んだ。研究テーマは、「心理尺度開発」「適応感」である。

### 1. 研究の概要

本研究は、2017 年度から看護学生用実習適応感尺度の開発に向け、研究を進めていた。しかし、covid19 の影響により研究が計画通りに進まなくなった。今まで行ってきた研究を含めて、以下に研究の概要を示す。

#### ① 臨地実習における適応感の質的研究；看護学生用実習適応感尺度（一次案）の作成

尺度項目を考案するために全領域の臨地実習を経験した 14 名を対象に、臨地実習における適応感に関するインタビュー調査を行った。グラウンデッド・セオリー・アプローチを用い、戈木（2018）の方法を参考に行った結果、実習適応感に関するエレメントが 320 個抽出された。そして、発語内容をもとに看護学生用実習適応感尺度（一次案）（実習前：26 項目、実習中：53 項目）を考案した。

#### ② Web 版予備調査；看護学生用実習適応感尺度（二次案）の作成

全ての臨地実習を経験した 34 名を対象に、看護学生用実習適応感尺度（一次案）を用いて予備調査を行い、項目案（実習前：18 項目、実習中：36 項目）を決定した。

#### ③ Web 版看護学生用実習適応感尺度の完成

2019 年度までは、看護学生用実習適応感尺度（実習前、実習中）を用いて web 調査が行えていた。しかし、2020 年度以降は covid19 の影響で臨地実習が今まで通りの形態ではなくなった（臨地で実習ができても時間短縮になったり、臨地が難しい場合は学内実習に変更したりという状況であった）。2020・2021 年度については 8 校から内諾を得ていたが 1 校のみ同意が得られた。また、別の 5 校に対して新規開拓を行い 1 校から同意が得られた。回答数（回答率）は 32 名（7.5%）であった。そこで 2019 年度までのデータと 2020 年度以降のデータを合体して分析を試みたが、尺度開発を行う上では調査対象者の条件（ここでは臨地実習の条件）を担保する必要があるため、データを合体することで疑似相関が生じる。よって、予定通りに研究は進まなかったが、2019 年度までのデータを用いて、看護学生の实習適応感について検討した。

## 2. 研究の動機、目的

個人の適応感を把握することは適切な心理面の支援に有用である。看護基礎教育においても臨地実習における適応感が研究されており、看護学生を対象とした実習適応感尺度が開発されている。しかし、これらの実習適応感尺度は研究者（教員）側が考えた学生の適応感をもとに作成されており、看護学生の実習に抱く気持ち（主観）を反映した尺度ではなかった。また、諸外国に比べ日本は、看護学生が臨地実習の不安からうつ病の罹患率が高いことが示されている（Tung, Lo, Ho, & Tam, 2018）。そこで本研究では、看護学生の主観を取り入れた看護学生用実習適応感尺度（実習前と実習中の2種類）を用いて、①臨地実習前における看護学生の実習適応感と抑うつとの関連、②臨地実習中における看護学生の実習適応感と抑うつとの関連について検討する。

## 3. 研究の結果

### ① 臨地実習前における看護学生の実習適応感と抑うつとの関連

【方法】看護学生 218 名を対象に web 調査形式で回答を求めた。回答時期は実習前一週間のいずれかの日と設定した。使用した尺度は筆者が考案した看護学生用実習適応感尺度（実習前）と CES-D の日本語版（島ら、1985）である。

【結果と考察】看護学生用実習適応感尺度（実習前）に関して、因子構造を確認するために因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。また、各下位尺度の信頼性係数の推定値として Cronbach's  $\alpha$  を求めた。実習前実習適応感尺度では、「実習前の心身の不調」「実習前のサポート資源」「実習前の予期不安」「実習前のやりがい」の 4 因子が見出された（Table 1）。 $\alpha$  係数は .69～.85 であり、尺度の項目得点の合計の平均値を尺度得点として求めた。

次に、CES-D 得点のカットオフ値を 16 点とし、抑うつ状態低・高群に分類した。実習前実習適応感の 4 つの尺度得点を従属変数、抑うつ状態低・高群を独立変数とし、 $t$  検定を行った（Figure 1）。結果、「実習前の心身の不調」においては、抑うつ状態高群のほうが有意に高かった【 $t(216)=-10.18, p < .01, r=.57$ 】。「実習前のサポート資源」においては、抑うつ状態低群のほうが有意に高かった【 $t(216)=3.26, p < .01, r=.22$ 】。「実習前の予期不安」においては、抑うつ状態高群のほうが有意に高かった【 $t(102)=-5.87, p < .01, r=.50$ 】。「実習前のやりがい」においては、抑うつ状態低群のほうが有意に高かった【 $t(112)=2.96, p < .01, r=.27$ 】。これは、実習前において、看護学生の抑うつ状態の低・高によって実習への適応感が異なることが示された。看護学生の抑うつ状態が低いほど、実習前に看護学生がサポート資源を得られていたり、やる気がみられたりと実習適応感のポジティブな側面に関係し、実習前から心身の不調があったり、予期不安であったりするほど実習適応感のネガティブな側面に関係していることが示された。以上から、特に実習前に抑うつ状態が高い看護学生に関しては、個々の変化に注意し、個々の状況に応じた対応が必要になってくると考えられる。

Table 1 実習前実習適応感尺度の因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	$h^2$
第1因子：実習前の心身の不調 ( $\alpha = .79$ )					
普段より体調がすぐれないように感じる	<b>.78</b>	.01	-.17	-.03	.50
実習のことを考えると寝つきが悪くなる	<b>.70</b>	.02	-.08	-.05	.45
実習のことを考えると精神的に余裕がなくなる	<b>.65</b>	.00	.22	-.01	.63
孤独感がある	<b>.64</b>	-.11	.06	.05	.48
第2因子：実習前のサポート資源 ( $\alpha = .85$ )					
頼れる人が身近にいる	-.02	<b>.91</b>	.08	-.06	.79
私の身近には私を十分理解してくれる人がいる	-.06	<b>.85</b>	.00	-.02	.74
サポートが欲しい時に十分なサポートが受けられている	.02	<b>.66</b>	-.08	.08	.49
第3因子：実習前の予期不安 ( $\alpha = .73$ )					
実習場の看護師との関係を築くことが非常に不安である	-.08	.03	<b>.85</b>	-.03	.64
患者との関係を築くことが不安である	-.09	-.05	<b>.70</b>	.01	.43
実習がとても不安である	.28	.06	<b>.51</b>	.14	.50
第4因子：実習前のやりがい ( $\alpha = .69$ )					
実習でしかできない経験を積極的にしたい	-.07	-.09	.05	<b>.77</b>	.56
実習に向けて、事前学習をしている時にやりがいを感ずる	-.08	.10	-.04	<b>.57</b>	.36
実習で楽しみにしていることがある	-.08	-.03	-.29	<b>.56</b>	.42
学内演習で学んだ看護技術を、実習で実践できるよう準備している	-.01	.01	.20	<b>.54</b>	.34
因子間相関					
第1因子	-				
第2因子	-.23	-			
第3因子	.55	-.10	-		
第4因子	-.15	.42	.03	-	

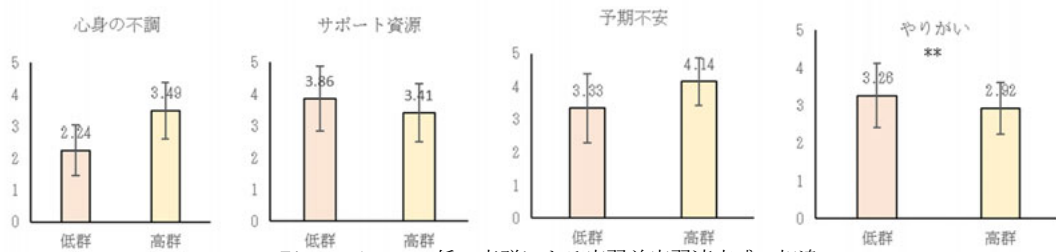


Figure 1 CES-D 低・高群による実習前実習適応感の相違

② 臨地実習中における看護学生の実習適応感と抑うつとの関連

【方法】看護学生 162 名を対象に web 調査形式で回答を求めた。回答時期は実習中のいずれかの日と設定した。使用した尺度は筆者が考案した看護学生用実習適応感尺度（実習中）と CES-D の日本語版（島ら、1985）である。

【結果と考察】看護学生用実習適応感尺度（実習中）に関して、因子構造を確認するために因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。また、各下位尺度の信頼性係数の推定値として Cronbach's  $\alpha$  を求めた。実習中実習適応感尺度では、「実習中の心身の変調」「実習中の学びやすい環境」の 2 因子が見出された (Table 2)。 $\alpha$  係数は「実習中の心身の変調」が .81、「実習中の学びやすい環境」.82 であり、尺度の項目得点の合計の平均値を尺度得点として求めた。

次に、CES-D 得点のカットオフ値を 16 点とし、抑うつ状態低・高群に分類した。実習中実習適応感の 2 つの尺度得点を従属変数、抑うつ状態低群・高群を独立変数とし、 $t$  検定を行った (Figure 2)。結果、「実習中の心身の変調」においては、抑うつ状態高群のほうが有意に高かった【 $t(155)=-11.18, p<.01, d=.74$ 】。「実習中の学びやすい環境」においては、抑うつ状態低群のほうが有意に高かった【 $t(160)=4.20, p<.01, d=.69$ 】。以上から、実習中において、看護学生の抑うつ状態の低・高によって実習への適応感が異なることが示された。

実習中において、抑うつ状態が高い看護学生ほど、適応感の中でも「心身の変調」をきたしやすいたことが示された。このことは、実習は学内の学習とは異なる環境で学ぶことになるため、不安やストレスを感じやすいことが明らかにされている (Jun & Lee, 2017) ことから、看護学生にとって実習は精神的に負担がかかりやすいと考えられる。一方で、抑うつ状態が低い看護学生ほど、適応感の中でも「学びやすい環境」であると感じていることが示された。Papp, Markkanen, & von Bonsdorff (2003) は、優れた臨床学習環境について、学校側と臨床側との良好な協力で確立されると述べていることから、看護学生の抑うつ状態のみで「学びやすい環境」がどうであるかを判断するのではなく、指導者側の要因も踏まえて判断する必要があるのではないかと考えられる。

以上から、全体的な傾向としては、抑うつ状態が高い看護学生ほど、実習への適応感が低いと考えられる。しかし、看護学生の抑うつ状態だけが実習適応感に関係しているのではなく、指導者側の要因も影響すると考えられる。したがって、看護学生の実習適応感と抑うつとの関連を検討する際は、指導者側の要因も含めて検討する必要がある。

Table 2 実習中実習適応感尺度の因子分析

	第1因子	第2因子	$f^2$
第1因子：実習中の心身の変調 ( $\alpha = .81$ )			
悲観的になりやすくなっている。	.74	.03	.53
精神的に余裕がもてている。	-.70	.06	.52
実習場では必要以上に緊張している。	.70	.00	.49
実習課題をこなすことが大きな負担である。	.68	-.05	.48
常に何か追われている。	.67	-.04	.47
実習場で自分が邪魔ではないか感じている。	.67	.02	.44
実習中は常に戸惑いがある。	.66	-.05	.45
体調がすぐれないように感じる。	.62	.11	.36
実習グループメンバーから、自分がどのように見られているか気にしている。	.62	.06	.37
指導的立場である人から、自分がどのように見られているか気にしている。	.60	.03	.35
実習のことを考えると寝つきが悪い。	.55	-.03	.31
実習目標に到達できるか心配である。	.52	-.01	.27
第2因子：実習中の学びやすい環境 ( $\alpha = .82$ )			
サポートが欲しい時にサポートが受けられている。	-.06	.73	.56
実習グループメンバーは心の支えであると感じる。	.13	.65	.38
充実感がある。	-.05	.63	.42
楽しさを感じている。	-.19	.62	.50
指導的立場である人から、自分のことを見守ってくれていると感じる。	.03	.60	.35
自分に理解を示してくれる人が身近にいる。	.04	.59	.34
実習グループメンバーとの関係はうまくいっている。	-.02	.55	.31
実習場の看護師から、様々なことを教えて欲しい。	.09	.44	.18
実習でしかできない経験は積極的に経験するようにしている。	-.09	.42	.21
因子間相関			
第1因子		第2因子	
第2因子	-.31		

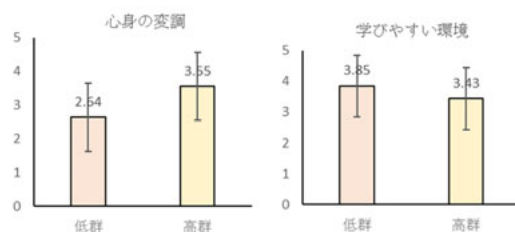


Figure 2 CES\_D 低・高群による実習中実習適応感の相違

#### 4. 研究者としてのこれからの展望

筆者は、今でも実習が始まると心身のバランスを崩してしまう看護学生と関わる機会がある。看護学生の個人要因は否定できないが、看護学生が臨地実習に適応していくには、指導体制を含む支援が重要であると考えます。また、covid19の状況次第では、今後も制限下で臨地実習を行うことになり、少なからず看護学生の適応感にも影響することは予測できる。よって、これからは臨地実習における看護学生の適応感を追究していくことと並行して、学校側と臨地側が共有して活用できる教育ツールを開発していきたい。

#### 5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

covid19の影響で予定通りに研究を進めることができず焦る気持ちがありました。しかし、看護学生は先が見えない・予定が定まらない中での臨地実習に疲れるという声を聞いたり、制限の中でも臨地実習に行けて良かったという声を聞いたりし、今できること・すべきことは何かを考える機会となりました。また、研究することが目的にならないよう、社会にどう還元していくかが重要であることを改めて気づくことができました。

臨地実習における看護学生の適応感に疑問を抱き、気づけば15年が過ぎていました。今後も引き続き、1人でも多くの志しをもった看護師を送りだせるよう精進して参ります。

日本私立学校振興・共済事業団の関係者の皆様、研究にご協力いただいた皆様、ご支援・ご指導いただいた皆様に心より感謝申し上げます。